沈積する<日本沈没>の物語

金津日出美*
h_kanazu@korea.ac.kr

<目次>

1. はじめに
2. 大きな物語と〈母性〉の語り―小松左京『日本沈没』
3. 摩耶子はどこへ行ったのか？
3.1 1974年版映画『日本沈没』とさいとうたかお版マンガ『日本沈没』
3.2 2006年版映画『日本沈没』―沈没しない「日本列島」
4. 〈日本の消滅〉と天皇の登場――色登希彦版マンガ『日本沈没』
5. むすびにかえて―もう一つの〈日本沈没〉の物語

主題語: 小説『日本沈没』(The Novel "Japan Sinks")、小松左京(Komatsu Sakyo)、映画『日本沈没』(The Movie "Japan Sinks")、マンガ『日本沈没』(The Comics "Japan Sinks")、天皇(The Emperor)

1. はじめに

COPPELION――これは、地震による原発事故に伴い放射能が大量流出し、廃墟と化した東京で活躍する、遺伝子操作によって放射能耐性を持たされた者たちの名である。井上智徳の手になる同名のマンガは、2008年より『週刊ヤングマガジン』で連載が開始され、震災後の2012年5月よりは『月間ヤングマガジン』へと連載の場が移された[1)]。「決して誰も見てはいけない未来―――。西暦2036年、東京は死の都と化していた」という宣伝コピーが付された同作品は人気を博し、すでにアニメ化が決定されていたものの、東日本大震災後に中止となった。物語のなかでは、東京お台場に建設されていた「新都電力」の原発が2016年に地震により爆発を起こし、東京は復旧すら不可能な廃墟となっている。それに対処すべく遺伝子操作によって生み出されたのが「COPPELION」たちである。生存者救出を命じられた自衛隊特殊部隊に所属する高校生である彼ら / 彼女らは、死の街となった2036年の東京に送り込まれ、そこで起こるさまざまな事態に対処していく。

* 高麗大學校 日語日文學科 副教授
1) 2012年8月現在、15巻までが単行本化されている(講談社)。

さて、2011年3月11日に起こった東日本大震災は、地震に引き続く津波被害、そして福島原発事故による放射能流出を引き起こした点において、これまでにない未曾有の事態である。家々を呑み込む黒い波──。1995年の阪神淡路大震災では、高速道路や高層ビルが時間を追うごとに倒れ、そして発生した火災が人々を呑み込んでいったが、今回の震災は濁流が人間活動を洗いざらい押し流していった。「想定外」──その後、何度この言葉を聞かされただろうか。果たして本当に「想定していなかった」のか。今、私は「想定していなかった」と記したが、ここには二つの意味──<予測可能であったが、想定していなかった>＜予測不可能であり、想定しえなかった>──が含まれる。「想定外」という言葉をそのままに信ずるならば、後者の意となろうが、本稿は、不完全な東京電力の資料公開、政府による事故調査等々の検討も含めて、この問いに対する答えを出そうとするものではない。果たしてわれわれは<予測しうる想像力>を持ちえていなかったのか。先に記したマンガ作品はあまりにも福島原発事故に酷似していると、震災当初よりネット上でその是非にまつわる議論が交わされた作品である。しかし、2008年に連載が開始されたこの作品でなくとも、戦後日本社会には災害をめぐるさまざまな物語が紡がれてきたことを知る人は多い[2]。その数ある作品のなかでも多くの読者を獲得している作品の一つが小松左京『日本沈没』であることに疑義を差し挟む人はいないだろう。本稿はこうした問題関心から戦後日本社会にどのような「日本沈没」の物語が沈積されてきたのかを探る試みである。

周知のように、小松左京『日本沈没』は日本各地で地震が頻発し、四国を皮切りに次々と日本列島が海中に沈み、最後に北関東が沈むことで日本列島すべてが海中に沈むといったSF作品である。本作品は1973年に上下2巻(光文社カッパノベルズ)で発表されるや、版を重ね、上巻204万部、下巻181万部、計385万部を売り上げベストセラーとなった(以後も含めれば400万部を優に超える)。1974年には第27回日本推理作家協会賞、第5回星雲賞(日本長編部門)を受賞し、日本においてSFが世に浸透するきっかけとなった作品ともいわれている[3]。

また、原作小説だけでなく、1973年、2006年には映画化、1974年にはテレビドラマ化[4]、1973年、1980年にはラジオドラマ化[5]されるが、1973年の映画は日本のみならず、ド

2) 原子力や原発をめぐる文学作品やアニメ・マンガなどについては、ひとまず川村湊『原発と原爆―「核」の戦後精神史』河出書房新社、2011年を参照のこと。
3) なお、原作小説の末尾は「第一部　完」と締めくくられており、続編が示唆されていた。2006年のリメイク映画公開に際し、谷甲州との共著で『日本沈没 第二部』が上下2巻で小学館から刊行された。
4) 1974年10月6日~1975年3月30日までTBS系列で放映された(日曜日午後8時~9時、全26回)。
5) 1973年10月8日~1974年4月5日まで、全国ラジオネットワーク(NRN)系列局で放映された(毎日放送制作、月~金、午後9時~9時15分、全130回)。1980年にはNHK-FMで「連続ステレオ小説」の枠で、1話15分の

イツ(1974)・アメリカ・スウェーデン(以上、1975)・フィンランド(1976)、2006年の映画は香港・韓国・シンガポール・タイ(2006)・フィリピン(2007)で公開され、世界的にも知られるようになった。そのほかにマンガ化も行われ、1970年代にさいとうプロが『週刊少年チャンピオン』に連載を開始、秋田書店から単行本が発売された[6]。また、2006年には樋口真嗣がメガホンをとった映画の公開にあわせ、一色登希彦が『ビッグコミックス　スピリッツ』に連載を開始する(~2008年)[7]など、メディア・ミックス作品としても展開している[8]。

上記にみられるように、『日本沈没』は戦後日本社会のなかで、さまざまなメディアにより形を変えながら、繰り返し取り上げられるソフトの一つとして定着しているといえるだろう。もちろん、東日本大震災以後には、あまりにも悲惨な現実とその記憶を想起させるものとして、大っぴらに語られることは少ない[9]が、この間の事態において、人々の脳裏に『日本沈没』の記憶がよぎったことは間違いないであろう。

ところで、『日本沈没』を扱った専論はさほど多くはないが、1995年以降の文学的想像力、あるいはサブカルチャー論との関わりから小松左京論を発表したのが、東浩紀である[10]。宇野常寛によるセカイ系[11]批判への応答を企図した東浩紀は、新井素子・法月綸太

全10回放送が行われた。

6) のち、1995年に講談社漫画文庫から復刊され、2006年には講談社が廉価版を発売、また同年にはリイド社から4巻構成で発売された。

7) のち、小学館ビッグコミックスから全15巻として単行本が出版された(2006~2009年)。

8) また、数多くのパロディ作品も作られており、早くは筒井康孝『日本以外全部沈没』(『オール讀物』1973年9月号)があり、小松左京『日本沈没』とともに第27回星雲賞(日本短編小説部門)を受賞している。2006年のリメイク版公開にあわせ、映画化もなされた(河崎実監督)。その他、小松本人による短編小説「日本漂流」(『話の特集』1967)や、横田順彌「日本ちんぼ＊」(『脱線！たいむましん奇譚』講談社、1978)などの小説、鶴田謙二ほか『日本ふるさと沈没』(徳間書店、2006)、なにわ小吉「日本ちょっと沈没」(『王様はロバ~はったり帝国の逆襲~』の一シリーズ、『週刊少年ジャンプ』1994~96年連載、集英社ジャンプコミックスデラックス第1巻所収、1994)、藤子不二雄「世界沈没」(『ドラえもん』小学館てんとう虫コミックス第4巻、1974所収)などのマンガなどでパロディ化されている。テレビアニメやバラエティ番組などでも「日本陥没」(「SMAP×SMAP」)、「日向家沈没」(「ケロロ軍曹」)など、枚挙に暇がない。そのほか、潜海艇「わだつみ」などのキャラクター商品も開発・販売されている(タカラ)。

9) もちろん、匿名のメディアであるネットの世界では、『日本沈没』と東日本大震災が重ねあわされて論じられることはある。しかし、被害の大きさ、被災者の心情からみれば、フィクションとして創作された世界と現実世界とを同一視してしまいがちな論調は表立っては生じていない。一方、韓国のメディアでは、震災当初に「日本沈没」といっ　たタイトルを付した報道が行われたことは周知の通りであるが、中央日報が謝罪文を出したように、それらの報道があまりにも極端であり、かつ不快感を惹起したことに対して反省する声も大きい。

10) 東浩紀「セカイから、もっと近くに！SF/文学論 小松左京と未来の問題1~3」『ミステリーズ』38、39、42号、東京創元社、2009年12、2010年2、8月。

11) 前島賢によれば、セカイ系とは「一人語りの激しい」「たかだか語り手自身の了見を「世界」という誇大な言葉で表したがる傾向」であり、「『新世紀エヴァンゲリオン』の影響を受け、1990年代後半からゼロ年代に作られた、巨大ロボットや戦闘美少女、探偵など、オタク文化と親和性の高い要素やジャ

郎・押井守の三人を取り上げた上で、小松左京論を展開する。そこで東は、一般に「セカイ系の想像力と対照的なもの」とみなされている小松左京をあえて「セカイ系」12)と同列の俎上に乗せて論じ、それらに共有されるもの──「セカイ系の困難」を抉り出そうとする。ここでいう「セカイ系の困難」とは、1995年以降の日本社会の長い停滞期を背景にした「現実への絶望、というよりも無関心」を前提に、「小さな日常と大きな世界を繋ぐ、いわゆる社会を描写することがとてつもない困難に感じられるような、そんなメンタリティ」を意味している。つまり、「日常」と「セカイ」を繋ぐ「国家や日本について語ることそのものに必然性を覚えない」ゼロ年代の想像力の困難さと言い換えることができよう。もう少し具体的にいえば、「セカイ系」には国家や社会、日本を語る物語が欠如W5年以降恋愛などの「日常」が、その対極にある「セカイの危機」に無媒介に連結され、そW5宇野常寛が批判したように、それらは往々にW5「肥大化した母性」13)をその特徴に持つ。したがって、いわゆる「セカイ系」といわれるとは群に比すれば、国家を語以降日本を語った「社会派SF作家」とよばれる小松左京はその対極に位置するということになろう。しかし、東は、小松の抱えた「困難」と「セカイ系」のそれを、そして「母性モチーフの肥大化」といった近接性を強調することでこの枠組みを反転させようとするのである14)。ここではその是非をゼロ年代のサブカルチャーから本格的に問う余裕はないが、東の言う、小松と「セカイ系」との近接性を、小松以降の『日本沈没』にみるならば、如何なる地図が描けるだろうか。

本稿では、震災後には正面切って論じられることは少ないものの、人々の心のなかに沈積する『日本沈没』が戦後日本社会のなかでいかに語られてきたのか、小松左京による原作小説そのものだけでなく、映画化・マンガ化された作品群を含めて、その改変のありようを提示することを目的とする。

ンルコードを作中に導入したうえで、若者(特に男性)の自意識を描写する作品群」と総括されている(前島賢『セカイ系とは何か』ソフトバンク新書125、2010年)。

12) 東浩紀のいう「セカイ系」とは「主人公と恋愛相手の小さく感情的な人間関係(「きみとぼく」)を、社会や国家のような中間項の描写を挟むことなく、「世界の危機」「この世の終わり」といった大きな存在論的な問題に直結させる想像力を意味している」(東浩紀(2007)『ゲーム的リアリズムの誕生』講談社、p.96)。

13) 宇野は「成熟忌避的な母性のディストピアともいうべき思考停止に陥っている」していると批判する(宇野常寛(2008)『ゼロ年代の想像力』早川書房、引用は文庫版2011年、p.263による)。

14) 東の立論では、敗戦経験という「困難」が、小松左京をしてSFという手法を選択させたのであり、また、小松作品にも「母性モチーフの肥大化」が指摘できるという(東前掲論文参照)。<敗戦経験>という「困難」とセカイ系のそれを同列に論じうるかについては異論も残るが、ここでは触れずにおく。

2. 大きな物語の語りと<母性>―小松左京『日本沈没』

周知の通り、小松左京『日本沈没』では、197X年に地下マントル層の対流現象に起因して京都や東京の地震、富士山の噴火などが起き、フォッサマグナを境に日本列島がねじ切れてすべてが海面下に沈む。そのような状況下で、原因と状況を調査する深海探査船のパイロット(小野寺俊夫)や、国民を海外に脱出させる「D計画」を進める科学者や政治家らを主人公に描かれる。主要な登場人物としては、D計画の中心的役割を担う科学者・田所雄介博士、潜海艇操縦士・小野寺俊夫、山本尚之総理、小野寺の婚約者・阿部玲子、政界の黒幕・渡老人などが挙げられる。

さて、小松左京『日本沈没』は下記の一文から書き始められる。

> H･T、K･H両先生はじめ、すべて“大いなるもの”に立ち向かいつつある人々に(傍点―引用者)[15]

―“大いなるもの”に立ち向かいつつある人々。まさにここに小松左京『日本沈没』の主たるモチーフがあることについて疑いを挟む人はいないだろう。したがって、第一章「日本海溝」、第二章「東京」、第三章「政府」、第四章「日本列島」、第五章「沈み行く国」、第六章「日本沈没」、エピローグ「竜の死」で構成されるストーリーのほとんどは、「沈没」という未曾有の状況を調査し、「国家」を、そして「国民」を如何に処するかに登場人物らが苦闘する姿によって構成される。

長編SF作品である『日本沈没』を論じるにあたっては、さまざまな観点にわたって論じることは可能であるが[16]、ここでは、「はじめに」で述べた「セカイ系」との近接性という点に関わって、第一に大文字で語られる国家、すなわち、「日本」「日本人」という問題、第二に「母性の肥大化」というモチーフを確認しておくことにしたい。

---

15) 小松左京(2006)『日本沈没』小学館文庫、p.5。以下、引用はすべて文庫版による。

16) たとえば、日本SF史的意味や、小松左京論における位置は無論のこと、3・11東日本大震災を経た現在においては大規模災害にあたっての国家間協力の問題、またその描かれ方と戦後日本社会のアジア認識など、論じられるべき問題は残されているが、これらの点については別稿を期したい。なお、日本SF史については、長山靖生(2009)『日本SF精神史―幕末・明治から戦後まで』河出書房新社、同(2012)『戦後SF事件史―日本的想像力の70年』河出書房新社 などがある。また、2011年7月26日の小松左京の死去を受けて、『文藝別冊［追悼］小松左京』河出書房新社、2011年、『完全読本さよなら小松左京』徳間書店、2011年などの追悼書、2011年7月の日付を持つ小松左京による序文を掲載した笠井潔・巽孝之監修、海老原豊・藤田直哉編集(2011)『3・11の未来―日本・SF・創造力』作品社、がある。

周知の通り、『日本沈没』は敗戦に直面した小松左京が戦後20年が過ぎようとしている時点で構想した作品であり、敗戦経験が小松の執筆動機であったことは、下記の本人の言からも明らかである。

> そもそも昭和48年(1973年)に出版された『日本沈没』第一部を書き始めたのは、昭和39年(1964年)、東京オリンピックの年だった。悲惨な敗戦から20年もたっていないのに、高度成長で浮かれていた日本に対して、このままでいいのか、ついこの間まで、「本土決戦」「一億玉砕」で国土も失いみんな死ぬ覚悟をしていた日本人が、戦争がなかったかのように、「世界の日本」として通用するのか、という思いが強かった。そこで、「国」を失ったかもしれない日本人を、「フィクション」の中でそのような危機にもう一度直面させてみよう、そして、日本人とは何か、日本とはどんな国なのかを、じっくりと考えてみよう、という思いで『日本沈没』を書きはじめたのである[17]。

したがって、高度経済成長により作り上げられた大都市・東京の姿などは「くさりゆく」「静かに無機質への崩壊過程をたどりつつあるのもの上にはえる、青白い、奇形のいのち……」[18]などといった描写で描かれることになる。そうしたなかで「日本など――日本か……」(田所博士、傍点原文)とても、日本と日本人の「未来」に関して重大なことを考えているとは思えない……」「――それでは、日本民族が……一億一千万の人間が、全部ほろんでしまってもいい、というのか？」(以上、邦枝、傍点原文)「日本人であり続けようとしても……これから先は、どちらにしても、日本の中だけでは、どうにもならない。外から規定される問題になるわけじゃからな……。“日本”というものを、いっそ無くしてしまえたら……日本人から日本を無くして、ただの人間にすることができたら、かえって問題は簡単じゃが、そうはいかんからな……」(渡老人)[19]など、本書のなかで滅びゆく「日本」を憂い、しかしその時点で彷徨する声は枚挙に遑がない。それに対し、可能な限りの海底調査をし終えた小野寺が職を辞そうとする際に語った「お礼奉公」という発言に対して、幸長助教授の心のなかで以下のように語らせて、「新しいタイプの日本人」の登場をほのめかしてもいる。やや冗長になるが引用しておこう。

> 〝お礼奉公〟という言い方を聞いて、幸長の頬に微笑が浮かんだ。――そういう考え方が、いか

17) 小松左京「あとがき」小松左京・谷甲州(2006)『日本沈没 第二部』小学館、pp.1015-1016
18) 前掲小松『日本沈没(上)』、p.107
19) 同前、p.175、前掲小松『日本沈没(下)』106、p.110、同前、p.112

にも戦後の青年だ。日本人として生まれながら、「国」だの「民族」だの「国家」だのに、暗い、どろどろした、宿命的な絆などまるで感じていない。それでいて、国に対する「貸し借り感情」はちゃんと意識していており、決して「恩義」を感じていないわけではない。だが、その「恩義」の感情は、民族や国に対して無限責任を感じたり、「運命共同体」の逃れられない紐帯を意識したりする形で出てくるものではなく、きわめてドライでクールで、「借り」を返しさえすれば、いつでも自由な関係にはいれるものとしてとらえられているのだ。(中略)──何という、さわやかなドライさだろう。「強制」や「義務」や「恩義の押し付け」「忠誠と犠牲の強要」「血縁」など、あのさまざまな紐帯でがんじがらめになっていた戦前までの日本からは、想像もできないような「日本人」が、今、眼の前にいることをさとって、幸長はちょっとした戸まどいといっしょに、さわやかなものを見たうれしさと、くすぐったい笑いがこみ上げてくるのを感じた。「戦後日本」は、何のかのといわれながら、その民主主義と豊かさの中から、こういう新しいタイプの青年を生み出してきたのだ。

このドライで、クールで、しかも人当たりのいい、人好きのする、おとなの悪魔的な意地悪によってつけられたねじくれた「傷」を負っていない、べたついたところがなく、物質や権力に対する執着もなく、生活に対する欲望も淡白で、さらりとした感じの青年たちは、いわば戦後日本の生み出した傑作といえるだろう。彼らは自分たちを「日本人」で。彼と感ず彼より、まず「人間」で。彼と感じており、日本人として生まれたことは、皮膚の色や顔かたちず彼がい、背の高さ、といったような、人間一人一人が持つ、しごく当然な「個体差・群差」としてしか意識していない。彼等は、自分たちを、「日本の中でしか生きていけない」と考えてはいない。地球上、どこへ行っても自分は生きていける、と思っている[20](傍点原文)。

おそらくこの箇所は、60年代後半から70年代という高度成長のひずみが表面化しつつある時期に執筆したものと考えられるが、そのような状況のもとの「日本」「日本人」の今後を語ろうとしたといえよう。特に先に引用した渡老人と比較してみれば、「日本」「日本人」の枠を捨てきれるかどうか、という点が鮮やかに対比されている。ただし、渡老人については、日本列島が最終的に沈む場面において、「わしの父は……清国の僧侶じゃった……[21]」と中国人に出自を持つことが明かされている。したがって、この渡老人のセリフは単なる「日本人」への固執という次元を越えており、敗戦後の日本社会を「日本人」として生きてきた彼の複層したアイデンティティが垣間みえる。とすれば、そうした微妙かつ複雑性を帯びる戦前の影をも頓着しない「戦後日本の生み出した傑作」とは、小松の「敗戦経験」を考える意味においても興味深い。

---

20) 同前、pp.171-172
21) 同前、p.378

そのほかにも、小松左京『日本沈没』においては、被災者の姿はほとんど登場しないという点も指摘できる。もちろん、噴火、地震、津波による脅威や被害に関する記述は散見される。しかし、そこにはほとんど人間が登場しないのである。いや、もっと正確にいうと、それは物語を彩る背景としてしか存在しない。唯一、とある家族が乏しい食料を得てくる場面があるが、それも戦後の混乱、食糧難とのアナロジーとして描かれる。つまり、未曾有の災害に直面した人びとのそれぞれの日常の物語にはほとんど紙幅が割かれていないといえる。このことは「日本」「日本人」という大文字の物語を語ることが作品の主要モチーフであるならば、当然の帰結であるともいえるだろう。

とまれ、「日本」「日本人」を肯定するにせよ、否定するにせよ、『日本沈没』ではこうした大文字の「日本」「日本人」の物語が基本軸に据えられている点を確認することは容易である。

次いで、「肥大化する母性モチーフ」に関わる問題をみておこう。『日本沈没』には、阿部玲子、摩耶子(マコ)の二人が主要な女性として登場する。阿部玲子は学歴も高く、留学経験・海外経験もある、奔放な女性であり、他方、銀座のバーのホステスの摩耶子とは対照的な存在として設定される。阿部玲子は小野寺と結婚の約束をするが、富士山噴火により消息不明となる。一方、小野寺が上司に連れられていったバー・ミルトで出会った摩耶子は、沈没のさなかで小野寺と再会し、かれとともにタヒチに向かって日本を脱出する[22)]。

東は、この二人の女性の描かれ方と、日本沈没に際して田所博士に語らせた「日本＝母」への愛をもって、「小松ＳＦが描く女性は、いまの視点からは、あまりにも男性に都合よく、受動的に造形されているように感じられる」「彼の女性観もまた、現代の文学から離れているように見えて、じつは驚くほど近いと考えるべきではないか」という。そして、以下のように続けている。

> 玲子と摩耶子の対立が、とりあえずは、日本の消失を前にした二つの選択肢、日本を捨てることと捨てないこと、西洋的原理に身を委ねることと沈みゆく国と「心中」することの二者の対立に重ねられていることは明らかである。『日本沈没』は、小野寺(戦後の日本人)が玲子(西洋)に惹かれつつも結局は摩耶子(日本との心中)を選ぶ、そういう物語だった。そしてここで決定的に重要なのが、失われる日本への哀惜の情を象徴するはずの摩耶子が、決して貞淑な「ふるい日本の女」としても、また母としても描かれていないということである[23)]。

---

22) 『日本沈没』第二部では、小野寺は摩耶子と思われる女性と結婚していたことを阿部玲子との再会の場面で語っており、二人は接近するものの、小野寺に「妻に悪い」というセリフを語らせ、二人の関係が旧に復すことはない。

23) 前掲東「セカイから、もっと近くに！SF/文学論　小松左京と未来の問題2」

『日本沈没　第二部』を読めば、阿部玲子は死んではおらず、また、小野寺自体は日本列島を脱出しており摩耶子を「日本との心中」として捉えるのについては異論も残るが、小松のなかにある女性がD計画という日本沈没という未曾有の事態への対処においては受動的な存在として描かれているという点にはひとまず賛同する。しかし、原作小説の最後の場面である小野寺と摩耶子の日本脱出における会話で取り上げられる、八丈島の丹那婆伝説[24]に纏わっての摩耶子のセリフを考慮すれば、「受動的」というよりは「積極的」に子孫を残していく女性の身体の力についての言及がみられることにも注意を喚起しておきたい。摩耶子のセリフは下記の通りである。

> 私、子供の時聞いたけど、こんな話、長いこと忘れていた。――でも、今度、あのあとで、急に思い出したの。そしてそれからずうっと、丹那婆のこと、考え続けていたのよ。すごい人だなって……暗い、悲しい、いやあな話だけど、その丹那婆の話が、あれからずっと、私の心の底で、私の支えになっているの。そうだ、私だって、島の血をひいている娘なんだから、たとえほかの人がみんな死んで一人になったって、生きていくわ。そうして、誰のでもいい、子種をもらって、赤ちゃんを生んで、一人ででも育てて見せる。――もしその子が男の子で夫がどこかへ行ってしまったら、その子と交わって、また子供を増やすんだって……[25]

無論、女性の身体を子を産むことに特化させるという視線は、小松のジェンダー意識を指し示しているともいえる。ただし、ここには異性愛秩序は前提視されているものの、一対の男女関係の永続、いわゆる一夫一婦的男女関係とは明らかなズレが見受けられる。また、沈みゆく日本列島から孫娘・花枝を脱出させる際の渡老人にも「赤子を生むんじゃ。おまえの体なら、大きい、丈夫な赤子が生める……。いい男を……日本人でなくともいい……。いい男を見つけて……たくさん生め……」[26]と語らせ、女性の身体を産む身体に特化させているものの、相手は「日本人」に限定してはいない。つまり、「子を産む」という人類の存続のための必須の力、それを宿す女性の身体への希望が示されているのである。もちろん、後者の花枝の場合は、自らの意志で積極的に関与しようとしてはいないため、「受動的」な存在である。しかしながら、摩耶子についていえば、自ら積極的に意志表明する女

---

24) 八丈島の丹那婆伝説とは、八丈島民の始祖伝説として語り継がれている話である。大津波に合った八丈島で妊娠していた丹那のみが生き残ったため、生まれた男子を育て、その子との間に女子を生む。そしてその男子と女子が夫婦になり、子孫を増やしていく。つまり近親間の交合の繰り返しにより八丈島の島民が形作られたという 始祖伝説である。

25) 前掲小松『日本沈没(下)』, pp.388-389

26) 同前、p.366

性として描かれているということには留意する必要があるだろう。ただし、それは宇野常寛のいう「成熟忌避的な母性の肥大化」――肥大化するディストピアのうちにおいて少年が少年のまま成熟しえない存在として閉じこめられる――とも位相を異にしている。そして、後述するように<その後の『日本沈没』の物語>においては、この摩耶子の存在 / 不在が大きな差異として展開されるのである。

3. 摩耶子はどこへ行ったのか?

3.1 1974年版映画『日本沈没』とさいとうプロ版マンガ『日本沈没』

それでは、小松左京『日本沈没』が発表されてまもなく、製作された映画『日本沈没』、マンガ『日本沈没』では、先に指摘した点はどのように描かれているだろうか。

まず、一点めについてはほぼ共通しているといえるが、大きな相違点は二点めである。資料の関係上、映画については詳述できないが、少なくとも上記二つの作品では摩耶子は登場しない。映画では石田あゆみ扮する阿部玲子は、富士山噴火で小野寺とは離れてしまうが、その後、日本を脱出しており、最後の場面でそれぞれスイスへ向かう車窓の人となっている。つまり、二人が約束したスイス行きがいつか果たされることを示唆するかたちで幕が閉じられている。この映画製作時点ではまだ第二部は執筆されていないため、阿部玲子の消息は小説の読者や映画の観客らには不明である。したがって、小野寺と阿部玲子の行く末はすべて観客の想像力に委ねられる。また、摩耶子が登場しなければ、八丈島の始祖伝説も登場しない。この意味では、まったく別の作品となっているといえよう。

また、さいとうプロ版のマンガ『日本沈没』では、摩耶子の代わりに原作には登場しない阿部トオルという玲子の弟が冒頭の場面から小野寺とともに登場させられる。玲子・トオル兄弟は小野寺の勤める企業の社長令嬢と子息であり、阿部玲子の奔放さは描かれない。そして、トオルには小野寺とともに沈没する日本列島からともに脱出する役割を与えられ、また、原作の最後の場面で小野寺が摩耶子に語る日本列島の安否を訪ねるセリフも、列車に乗り合わせた救援隊員・片岡が小野寺に語るセリフに改変される[27]など、摩耶子の存在は完全に消されている。映画とは異なるものの、やはり原作とは別の作品として仕上

27) 引用は、リイド社版のさいとうプロ『日本沈没』による。第4巻、pp.250-251

げられているといえよう。

では、こうした改変は何を意味するのだろうか。映画での阿部玲子は奔放な女性であり、水着姿で小野寺とのラブ・シーンを演じる存在である。他方、さいとうプロ版『日本沈没』が成年男性向けのマンガであったことから、阿部玲子を自分からは小野寺への愛を口にできない「日本の古い女」へと生まれ変わらせようとした可能性はあるだろう。性的対象としての女、そして良家の子女というメダルの裏表ともいえる、男性からする女性観をもとに描き出されているといえよう。あるいは、追い求めるべき「永遠の女性」として「日本」にアナロジーさせつつ、語りだしたともいえるかもしれない。さいとうプロ版『日本沈没』のラストは小野寺とトオルの乗る列車が走る場面に、阿部玲子の顔が大写しに描かれるといった構図になっている28)こともこのことを傍証するだろう。

3.2 2006年版映画『日本沈没』―沈没しない「日本沈没」

2006年、樋口真嗣監督により映画『日本沈没』が製作された。この映画は数ある『日本沈没』に纏わる作品群のなかで異色を放っている。日本は沈没しないのである。

あらすじはこのようなものである。日本列島に頻発する自然災害の原因調査のために、操縦士・小野寺俊夫とその同僚・結城、田所博士は潜水艇わだつみ6500に乗り込み深海調査に向う。その後、日本列島は1年以内に沈没するという調査結果が明らかとなるが、学会では受け入れられない。しかし、時の山本内閣は田所の説を受け入れて、危機管理担当大臣に田所の元妻でもある鷹森沙織を任命し、事態の対処に当たる。一方、被害者救出に向かった小野寺はハイパーレスキュー隊員の阿部玲子と出会い、震災孤児・倉木美咲を救助する。阪神淡路大震災で両親を失った阿部は美咲を引き取ることにするが、徐々に小野寺と阿部の間には愛情が芽生えていく。次々に日本列島を襲う自然災害に、政府は日本国民の海外避難の道を模索するが、被害は拡大し、犠牲者は増大の一途をたどっていく。そのようななか、海底プレートに衝撃を与えることで、日本沈没を引き起こす地殻変動を食い止められるという方法が見つかる。小野寺は愛する玲子たちを守るため、爆薬を搭載した潜水艇を操縦し、深海へと向かう。命をかけた小野寺のミッションによって日本列島は沈没の危機を回避することになる。

改めて言おう――日本列島は沈まない。ハリウッド映画「アルマゲドン」(1998年)さなが

28) 同前、pp.252-253

ら、小野寺の操縦する潜水艇による爆破の衝撃が海底プレートにショックを与え、沈没の危機は回避されることになる。小野寺にその決断をさせたのは、阿部玲子への思いである。したがって、映画の中心軸の一つは小野寺と阿部の恋愛となることは必然となる。ここにいわゆる「セカイ系」とよばれる作品群との共通性を見ることはたやすい。つまり、日本沈没、日本国家の崩壊という、いわゆる「セカイの危機」が、男女の恋愛、そしてそれによる男性の「果敢な犠牲」により解決されるのだ。東の簡便なまとめを借りれば、「主人公が女性への愛ゆえに行った自殺的な対策(海溝への爆薬投下)が、奇跡的に列島の沈下を止めて人々を救った」のである。東はこの映画を「『日本沈没』のセカイ系化」と呼ぶ[29]。

ハイパーレスキュー隊員として生まれ変わらされた阿部玲子、原作には登場しない田所の元妻(原作の田所は独身)、もちろん、ここには摩耶子が登場する余地はない。そもそも田所に別れた妻がいる時点で、田所の「日本＝母/女」への愛は描きようがなくなるが、これは単なるキャスティング上の問題だけではなく、映画のモチーフにも関わる問題である[30]。小野寺の阿部への愛が日本を救う。つまり、日本を(「セカイ」を)救う男女の恋愛は、ただ一組の「きみとぼく」――小野寺と阿部――でなければならない。したがって、映画では小野寺と阿部のシーンが必然的に増えることになり、ある意味で「日本」「日本人」の物語は後景に退いてしまうのである。

では、まったく「日本」「日本人」は描かれないのか？もちろん答えは――否、である。そもそも日本列島の沈没という事態にいかに対処するかという物語の流れそのものは変えられない。山本総理、田所博士、鷹森沙織危機管理担当大臣等々、未曾有の事態に奔走する登場人物。日本列島沈没という、住み慣れた場所の喪失への危機感、それに伴う海外への脱出、難民化は、宣伝コピーに多用されるように「日本人のアイデンティティの喪失」へと接ぎ木されるのはたやすい。そして、結末「日本は沈まない」。となれば、そこには揺り動かされた喪失、不安に解決の場所を再度与えてしまうだろう。

そればかりではない。――そのとき、あなたは誰と、どう、生きていきますか？　これは公式ガイドブックの冒頭に大書されたコピーである。先に小野寺の阿部への愛が日本を救うと記したが、厳密に言えば、男女二人の愛だけではなく、そこには新たな家族の愛が差

---

29) 前掲東「セカイから、もっと近くに！SF/文学論　小松左京と未来の問題2」

30) 樋口真嗣監督自ら「やるんであれば、やっぱり同じ話にはできないというのがあったんですよ。……“変えても いいですか”と。“登場人物は揃えますけど、全然違う話にしてもいいですが”って言ったんですよ。原作ものなので、そこだけ確認させてもらって。それでよければやらしてくださいと」(『ぴあMOOK 日本沈没 OFFICIAL BOOK』ぴあ株式会社、2006年、p.83)と語るように、2006年版映画『日本沈没』は原作との接点はあらゆる場面で残されてはいるものの、そのモチーフはまったく異なっている。

し込まれていることにも留意する必要があるだろう[31]。小野寺が爆破計画を実行する前に、同様の爆破計画は同僚の結城達也によって行われることになるが、彼は激しい乱泥流に巻き込まれ、計画を果たせぬままわだつみとともに海溝に沈んでいく。彼を深海底に向かわせたのが、ほかならぬ家族への愛であった。潜水艇のなかで家族の写真を眺める結城。演じた及川光博も「家族を守る責任感が芽生えた」と語る[32]。そして、小野寺自身も地震で家族を失った美咲、そして阿部玲子との血はつながらないまでも新しい家族の形態をつくりつつあるなかでの決断であった。

> 僕だってもし日本が沈んでしまうと言われたら、条件のよい話があればそっちに流れていくと思う。それが人間だと思う。自分のことを最優先してしまうのは当たり前のことですよね。でも小野寺の場合はそれが変わっていくんですよ。自分の使命みたいなものを感じるようになっていく[33]。

これは、小野寺を演じた草彅剛のインタビューのなかの発言であるが、利己主義、個人主義的な生き方から、未曾有の事態に直面して感じる使命へと変貌していく感情。作中の小野寺にはいったんイギリスでの就職話が持ち上がり、阿部玲子とともに日本を脱出しようと考えるが、人命救助への強い信念からする玲子の拒否に合い、日本にとどまり、最終的には事態を押し止めるために命を捧げることになる。沈まない日本との心中は描きえないが、結局は「日本」を残し、そしてそこにとどまりうる「日本人」を設定し、男女愛、家族愛、日本人の紐帯を描くことで、「日本」「日本人」は温存されることになるといえるだろう。2006年版映画の特徴はこの点にある。

東のいう「『日本沈没』のセカイ化」という点はこのような意味でも再考されねばならない。大きな物語は後景に退くにしても、最後に「日本(セカイ)を救う」というのは、そこに「国家や日本について語ることそのものに必然性を覚えない」ゼロ年代の想像力を読み込むのではなく、「日常」と「セカイ」が無媒介に接続されることによって得られる危険性――その隙間に入り込むナショナルな意識――とともに読解されねばならない。すなわち、自覚的に語らないまでも、国家や日本について思考を停止してしまうことによって、委ねられて

---

31) この家族への愛という論点に関しては、本稿のもとになった筆者の口頭発表(<ポスト3.11と人間: 災難と安全研究プロジェクト>国際学術大会、2012年9月18日、高麗大学校日本研究センター)での議論によって示唆を受けたものである。ここに当日の討論を担当していただいた徐東周氏、全成坤氏をはじめ、参加者のみなさまに記して感謝の意を表したい。

32) 前掲『ぴあMOOK 日本沈没 OFFICIAL BOOK』、p.45

33) 同前、p.34

しまうナショナルな何か――。90年代後半から現在に続く「失われた20年」において、右傾化や保守化の進行する日本社会の現状、それを結果的に支えてしまう政治的無関心などとともに、ゼロ年代の想像力は論じられねばならない。

4. <日本国の消滅>と天皇の登場
一色登希彦版マンガ『日本沈没』

さて、映画のリメイクにあわせて一色登希彦の手になるマンガが発表されたことは先に記したが、そこではどのように描かれているのだろうか。簡単にいえば、2006年版映画にみられた大きな改変は、再度書き換えられることになる。

まず、もちろん日本は沈む。映画で日本沈没を押しとどめたプレートへの物理的衝撃は試みられるものの失敗する。したがって、日本を(「セカイ」を)救う「きみとぼく」の物語は成立しない。日本列島に最後に残された生命反応(実はニホンオオカミ)を手がかりに沈みゆく日本に向かった小野寺と阿部玲子は、オオカミの救出途中で大津波に巻き込まれ、小野寺は海の藻屑になってしまうのだ。言い換えれば、日本列島に残る最後の生命体を救出するために、命を落とすという設定となる。

では、「日本」「日本人」の行く末はどうなるのか。詳述する余裕はないが、結論だけいえば、「日本国」という国家は消滅し、「日本国籍」を消失した「元日本人」は世界各地に受け入れてもらう代償に、私有財産を提出し、国連指揮下の国際救助隊に所属することになる。D計画の主導者・中田のセリフにより説明を加えておこう。

> 全てを奪われる覚悟で世界中に上陸した日本人は、今頃驚いているはずさ…それぞれの全資産は提出させられたものの、没収ではなく、当面の間の一元管理。衣食住をはじめ、生産・商業活動の土台を築く為に最大効率で利用され、全て日本人に還元される…日本語を使用し…日本名を名乗り…すでに、世界中のほとんどの上陸地点で最低限の生活基盤、生活資材の事前調達が完了し、もちろん、日本人の提出する資産が、その支払いにも当てられてゆく。(中略)そして…国を持たない「元日本人」は、全員が、今後永久に…国連指揮下の〝国際救助隊〟に所属する。戦争・事故・事件・災害の区別なく……地球上のあらゆる災厄に真っ先に駆けつけ……どれだけ過酷な現場であろうと、誰彼の区別なく〝救難〟を行う。(中略)「元日本人」は今後、この業務において生活する以外の選択肢はない。なぜなら…国連の救助受け入れの条件

として我々は、世界中の受け入れ国での我々の「就労の自由」「職業選択の自由」だけは放棄したからだ。相手国の人々の仕事を奪う事は断じてない。今後「元日本人」の生き残る道は、戦争の最前線だろうと誰かを助ける為に駆けつけ…そんな我々の存在を常に「よいもの」「必要なもの」としてくれる世界からの〝寄付〟を頼り続けるのみだ…(傍点原文)[34]

この選択は、自国の労働力が脅かされたり、食糧・土地不足への危惧を背景に「難民」としての受入表明国が不足する状況下において、選択されたものであるが、これにより「日本国」「日本人」という存在は、名実ともに消滅することになる[35]。原作に引き続く小説『日本沈没』第二部では「日本国政府」は領土を持たない国家として温存され、世界各地に居住する「日本人」もまた、希望すれば「日本国籍」保有が承認されていることと比較すると、2006年版マンガの大きな特徴であるといえる。安住・安堵をもたらす「日本」自体は消し去られてしまうのだ。

ただし、本作にはそれ以前のものには登場しない、ある一人の人物が登場する。──それがまさに「天皇」なのである。これまでの『日本沈没』でも皇室をスイスに移す計画が占めされる形で天皇への言及は存在するが、「天皇」そのものが動く登場人物として描かれたことはない。2006年版マンガ『日本沈没』での「天皇」は、D計画進行中において避難民のなかに蔓延る無気力、それを打ち破ろうとするかのような無差別殺人事件が勃発するなか、「願わくは…今、世界中に散ってゆく日本人の顔に…ほんの一握りの「生気」があって欲しいとは思うが…そこまでは望めないか…僕らは「神サマ」じゃないからね…(中略)「ツケ」も「ケチ」もつけず、掛け値なしに全ての国民の気持ちを負って自然体でいられる…そんな事ができる人間」の存在を「もう…いない……な」と諦めた中田総司令の発言[36]のあとに、満を持して登場するのである。

(前略)我が国の、国土の、消失と、国民の、諸外国への移住が、不可避となったいま…国民にむけて、わたくしの、思いを、伝えたいと、考えます。わたくしが、この場所から、国民に向けて話ができる機会も、最後かもしれません。(中略)国民、すべてが、諸外国への「移住」を避けられぬこと、その、「移住」が必ずしも皆が望む形ではないことも、聞き及んでいますし、それゆえ、残念ながら、皆の顔から、元気や、笑顔が、見られなくなってしまったことも、無理からぬことと、考えます。(中略)たいせつなことは、国家や人種ということではなく、ひとり

34) 一色登希彦(2008)『日本沈没』第15巻 小学館、pp.206-209
35) ちなみに沖縄は沈まず、日本国消滅以前に日本政府により独立承認が行われ、独立国家としての道を歩みはじめる(同前、p.211)。
36) 一色登希彦(2009)『日本沈没』第14巻、p.137、pp.150-152

ひとりが「人」として、胸を張って、目と目を合わせ、「人と人のつきあい」をきちんとしてゆくこと、そうしたことが大切なのではないでしょうか。本来、日本の人びとは、そうしたことが上手な人々であると思います。礼儀を大切にし、優しさにあふれ、人の為に生きる美しさを持ち…わたくしは、もし、日本と、日本人を誇るとしたら、そうした点においてであると、考えます。(中略)自然の驚異と不思議に対しては、わたくしたち、人間は、ただ、それを、思い、知るのみで、列島の、消失 / 沈没もさることながら、列島が、消失しきるまで留まり続けるとされる、この、雨と、風をもたらす台風によって、皆の心から、晴れやかさが一層失われている事でしょうが、眼前の世界の、天気の良し悪しとは別に、「晴れ晴れとした心の持ちよう」は、また、あるのではないでしょうか？(後略)[37]

30ページにわたる「天皇」(テクストでは「あの人」「ご本人」などと示され、「天皇」という名指しはされない)の演説は、皇居から全周波数域とネットを介して伝えられ、意気消沈する日本国民「全て」が聞き入る姿とともに描かれる。「わたくしたち、人間は」は自然の力をいかんとする術をもたないというセリフには、「神」ではない「人間・天皇」という戦後の天皇制の根幹の一つが示される。そしてもう一つの根幹である象徴天皇制を暗示するように、このセリフが挟み込まれるのである。つまり、そこで語られる「晴れ晴れとした心の持ちよう」というセリフは、その後のストーリー展開において重要な役割を果たすのみならず、実際に沈没まで引き続くとされた台風の晴れ間をももたらしてしまうのだ。したがって、つまり、そ本書の結末である「日本国・た台風の消滅」の低音として伏奏する存在となるのである。もちろん、ここで一色自体が自覚的なまり主義者であるということを言わんとしているのではない。強固な「日本・た台風」アイデンティティの、あるいは「た台」を語る大きな物語心の持ち確固な存在としてまりを明示的に位置づけ很のスしているというよりは、列島沈没と脱出計画という「大きな物語」には関与しないものの、それでいてある意味「空気」のような「精神的な支柱」としてありうべき存在として想起されざるをえない構図になっているのである。「天皇」がこのような役割を付されながら登場する『日本沈没』テクストは、この一色版『日本沈没』のみである。難民生活を送る「元日本人」に「救い」を与え、そして「日本人の誇り」を語ることにより、「消滅」したはずの日本・日本人アイデンティティを再度構成したともいえよう。

一方、阿部玲子、摩耶子らの女性登場人物はというと、ハイパーレスキュー隊員として活躍する阿部玲子の設定は2006年版映画と同様であるが、摩耶子はマコという名で本編に

37) 同前、pp.159-177。なお、実在の天皇は、東日本大震災後の2011年3月16日にビデオでもって「お言葉」を読み上げた。また、一周年に当たる2012年3月11日の追悼式でも「お言葉」を述べている。

おいて主要な役割を与えられて再登場する。しかし、一色版『日本沈没』では一対の「きみとぼく」の世界は成り立たない。当初は小野寺と阿部の関係が微妙な距離を保ちながら描かれるが、列島沈没阻止計画失敗以後に記憶を失った小野寺(記憶喪失の間は小野田と名指される)の、現実とのギリギリのところでの接点としてマコが描かれるのである。小野寺を列島沈没という現実につなぎ止める役割を付与されたマコは、当初から何がしかの霊力をもつ存在として描かれ、不治の病(脳腫瘍)を抱え、余命幾ばくもないことが途中で暗示されるものの、出生や来し方も明示されない、最後まで謎の存在である。記憶喪失中の小野寺と性的関係も持つが、それはマコにとっては一対の絶対的・至高の「きみとぼく」の世界ではなく、そして小野寺にとっても現実との接点ではあっても、世界を救う「きみとぼく」の関係として描かれることはない。この意味で一色版『日本沈没』は映画とタイアップしながら執筆されたとはいっても、逆に映画とは異なる世界を描き出そうしているといえる。そして、原作小説にあった八丈島の丹那婆伝説もマコに語らせるが、余命が残されていないことを知るマコには、子どもを産む力はすでにない。死を迎える間際に小野寺に語るセリフ——「小野寺さん、女の人にたくさん……赤ちゃん産んでもらうといいよ……また玲子さんにおこられちゃうね、こんなこと言うと……」[38]——は、玲子との間での子孫も想定していない。その後、息を引き取ったマコは、日本の沈没とともに海底に沈んでいく。不治の病であるゆえに「心中」とはいえないものの、「生きている人のところに戻るといいよ、小野寺さん。マコの最後の時間をいっしょに生きてくれてありがとう……さようなら」[39]という言葉を残し、列島とともに沈んでいくマコの場面は、「日本の最後の時間」とも読み替えられる要素を含んでいる。

それでは「生きている人のところ」にいる阿倍玲子との関係はどうなったのか。それは最後に挿入されるストーリーに示される。一色版『日本沈没』のラストは列島脱出後の数年後の場面となるが、そこに顔が陰に隠された、井戸掘り作業に向かうためにバイクに乗る男女二人の姿が描かれる。かつて居酒屋での好物であったつまみの名称が示されることで、小野寺と阿部である可能性を暗示してはいるものの、正確には特定しえない手法がとられている。実は、列島脱出計画完了の場面において小野寺と阿部の列島での最後の結婚が誓約されるのだが、その誓いの場面は急遽、地震以前の東京に反転し、すべては「日本沈没」という「作品」(劇中劇)であり、小野寺と阿部の結婚祝いを兼ねた演者らによる打ち上げの場面となる。しかし、その場面があらかた進行した後、再び急遽、夢から覚める小野寺の

38) 同前、第15巻、p.65
39) 同前、pp.73-74

場面に再反転するのだ。つまり、二人の関係は描かれるものの、それは二転、三転させられることで、ある意味で「きみとぼく」の世界の危うさを気づかせているのかもしれない。ともかく、日本が救われない時点で2006年版映画の世界で描かれる一対の「きみとぼく」の世界は崩されているといえるだろう。そのほかにも、2006年版映画に登場した鷹森沙織は総理秘書官としてリニューアルされるなど(もちろん、田所の妻でもない)、2006年版映画批判としての一色版『日本沈没』は、マンガというメディアに場を移した、もう一つの『日本沈没』の物語が示されている。

5. むすびにかえて―もう一つの<日本沈没>の物語

以上、『日本沈没』というある一つの作品を小説、映画、マンガという媒体でリメイクされながら描かれた世界を示してきた。論じ残された問題は数多くあるが、最後にもう一つの<日本沈没>の物語を取り上げて結びとしたい。

かわぐちかいじ『太陽の黙示録 第一部群雄編』(全17巻)、同『太陽の黙示録 第二部建国編』(全9巻)は、前者が巨大地震、それに引き続く噴火により分断された日本列島を、南をアメリカ、北を中国が管理し、両政府の正統性の争い、台湾への大量難民、世界各地への「棄国者」の姿を描いた物語であり、後者は柳・宗方・孫市を中心に再統一される過程を描いた作品である[40]。日本列島すべては沈没しないものの、巨大地震を契機に列島は琵琶湖を境に二つに割れて国土の約1/5が海中に沈む。残された地域は札幌を中心とする北日本(ノースエリア・中国が主導)、福岡を中心とする南日本(サウスエリア・アメリカの後ろ盾)、そして南北不可侵領域(グレーゾーン・民間ベース)の三地域に分かれ、それぞれ孫市権作、宗方操、柳舷一郎を中心としながら物語が展開する[41]。また、これら登場人物の名に示されているように、『三国志』がもう一つのモチーフになっていることは明らかである(孫市権作⇔

40) 『ビッグコミック』(小学館)に、第一部は2002-2008年に、第二部は第一部終了の翌号より2010年にかけて 連載された。

41) これら登場人物の名に示されているように、『三国志』がもう一つのモチーフになっていることは明らかである(孫市権作⇔孫権仲謀、宗方操⇔曹(宗)操孟徳、柳舷一郎⇔劉(柳)備玄(舷)徳)。その他にも『三国志』の登場人物に由来する名が数多くある―たとえば、張宗元(張飛)、羽田遼太郎(関羽)、夏木惇史(夏侯惇)、賀来嘉孝(郭嘉)、公文讃(公孫瓚)、董堂卓也(董卓)、周真瑜(周瑜)、勝呂奉一(呂布)、夏木恵理(夏侯恵)、孫市堅一郎(孫堅)、孫市策太郎(孫策)、雲井竜児(趙雲子竜)、葛城亮・葛城明子(諸葛亮孔明)等。

孫権仲謀、宗方操⇔曹(宗)操孟徳、柳舷一郎⇔劉(柳)備玄(舷)徳)。

日本列島の大変動、それに伴う「棄国者」「難民」「移民」、「日本人・日本国の消滅」などが描かれるが、『建国編』で最終的に「再統一」を果たすことで、「日本」は修復されることになる。つまり、修復に向けた大きな物語が政治ベースと民間ベース、国際政治力学での絡み合いを通じてストーリーが展開され、終始一貫して「新たな日本」「新たな日本人」が繰り返し問われていく。

『太陽の黙示録』もまた震災以前に執筆されたものであるが、震災後の作品がいかなる「沈没」の物語を紡いでいく(ける)のか / いか(け)ないのか、すでにいくつかのマンガ作品が発表されているものの、いまだ作品化に成功しているものは少ない。震災後のストーリー化がどのような形で行われるのか、今後も注視していきたいと思う。

【参考文献】

東浩紀(2007)『ゲーム的リアリズムの誕生』講談社
_____(2009・2010)「セカイから、もっと近くに！SF/文学論　小松左京と未来の問題1~3」『ミステリーズ』38、39、42号 東京創元社
一色登希彦(2006-2009)『日本沈没』第1~15巻 小学館
井上智徳『COPPELION』第1~15巻 講談社
宇野常寛(2008)『ゼロ年代の想像力』早川書房
笠井潔・巽孝之監修、海老原豊・藤田直哉編集(2011)『3・11の未来―日本・SF・創造力』作品社
かわぐちかいじ(2003-2008)『太陽の黙示録 第一部群雄編』第1~17巻 小学館
_____(2008-2012)『太陽の黙示録 第二部建国編』第1~9巻 小学館
川村湊(2011)『原発と原爆―「核」の戦後精神史』河出書房新社
小松左京(2006)『日本沈没』上下巻 小学館文庫
小松左京・谷甲州(2006)『日本沈没 第二部』上下巻 小学館
さいとうプロ(2006)『日本沈没』第1~4巻 リイド社
徳間書店(2011)『完全読本 さよなら小松左京』徳間書店
長山靖生(2009)『日本SF精神史―幕末・明治から戦後まで』河出書房新社
_____(2012)『戦後SF事件史―日本的想像力の70年』河出書房新社
ぴあ編集部(2006)『ぴあMOOK 日本沈没 OFFICIAL BOOK』ぴあ株式会社
文芸編集部(2011)『文藝別冊［追悼］小松左京』河出書房新社
前島賢(2010)『セカイ系とは何か』ソフトバンク新書125

논문투고일 : 2012년 09월 10일
심사개시일 : 2012년 09월 20일
1차 수정일 : 2012년 10월 10일
2차 수정일 : 2012년 10월 20일
게재확정일 : 2012년 10월 25일

<要旨>

沈積する<日本沈没>の物語

本稿は、戦後日本社会に定着したソフトである『日本沈没』の物語を、原作小説である小松左京『日本沈没』のモチーフを確認した上で、その後に映画やマンガといったメディアで展開された「日本沈没」の物語とともに解読したものである。その際に、批判的前提としたのは「セカイ系の困難」という1990年代後半以降の「ゼロ年代の想像力」の文脈で読み込まれる「日本沈没」像であった。国家や日本人を語らない、無関心のセカイ系をめぐる議論の危うさを指摘し、2000年代に生み出された映画「日本沈没」、マンガ『日本沈没』を題材に論じた。たしかに「日本」「日本人」というナラティブは後景に退くものの、そこには別の形で準備されるナショナルな意識、アイデンティティが存在することを指摘した。

Transported Story of the “Japan Sinks”

The purpose of this paper is the decoding of the story of the "*Nihon Chimbotsu*(Japan Sinks)" which was settled in postwar Japanese society. I analyzed as well as the original text, but also movies and *manga*(comics) was made after. This paper criticized the statue "*Nihon Chimbotsu*" is read in the context of "Imagination of the 2000s." called '*Sekai-kei no Kon'nan*(Difficult of the younger generation)'. I discussed the theme of the movie "*Nihon Chimbotsu*" and the manga "*Nihon Chimbotsu*" was made in the 2000s, and pointed out vulnerability of Sekai-kei which do not discuss the Japan and Japanese. Although certainly narrative of "Japanese" and "Japanese" is weak, and I pointed out that a national consciousness and national identity in a different way.